



写真は、『勲一等瑞宝章』です。昭和53年(1978)の秋に岡崎

嘉平太さんが、叙勲を受けられました。

また、岡崎嘉平太記念館の講演会の講師として、中国より

お招きした 劉徳有 さんも、平成12年(2000)の春に、『勲二等旭日

重光章』の叙勲を受けています。

勲章は、日本の栄典(名誉)の一つで、国や社会公共に対して優れた功績をあげた人におくられます。日本政府には、内閣府勲章局があり、勲章などの授与の審査を行っています。受賞者は、勲章を身に付けて配偶者とともに、天皇陛下に拝謁します。



前列左から3番目が嘉平太さん、後列左から3番目が時子夫人

岡崎嘉平太記念館発！もったいない  
嘉平太さんも実践した  
無駄を省く、活かす生活態度  
～膝をつき合わせて伝える取り組み～

昨年2月に記念館で『もったいない座談会』を開催しました。参加くださった10名の地域の方に“私のエコ”と言う主題で日々の実践や考えを教えてくださいました。“知恵や実践を伝えあえてよかった”“子どもたちや若いお母さんにも伝えたいな”と感想をいただきました。

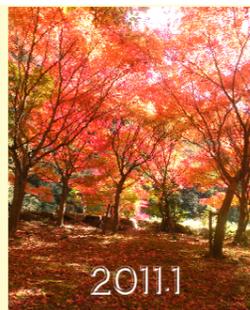
そして、ある家庭の実話をもとに、小さなじゃこたちのお話が生まれました。偏食をせず「いただきます」の声が聞こえる食卓、無駄なく食すよう努める家庭が増えるといいな、との願いが込められたお話です。写真は、人形劇の創作のために集まった様子です。



「物語の一部を紹介します」  
「お魚は、きらいだよ」  
幼稚園へ行っているだいちゃんは、ちりめんじゃこを一匹ずつ、お茶碗の中から出しはじめました  
お父さん  
「このちりめんじゃこには、一匹一匹みんな命があつたんだよ。海で楽しく暮らしていたのに、人間のためにその命をくれたんだよ」



編集・発行：岡崎嘉平太記念館  
〒716-1241 加賀郡吉備中央町吉川4860-6 きびプラザ内  
TEL 0866-56-9033 FAX 0866-56-9066  
ホームページ http://www.okazaki-kaheita.jp  
Eメール okmh@okazaki-kaheita.jp



2011

# 岡崎嘉平太記念館

だより



Vol. 14

嘉平太氏が出会った人々

湯恩伯将軍 (二八九九〜一九五四)

中国の軍人。日本の陸軍士官学校卒。後、黄埔軍官学校教官。蒋介石の信任を得、第二三軍軍長、第一戦区副司令などを歴任。終戦時には第三方面軍司令として上海で日本軍の武装解除と本国送還に当たった。一九四九年南京・上海・杭州地区警備司令として人民解放軍の南下を防止しようとしたが敗れ台湾に逃れた。その後四回再来日、嘉平太氏とも親交を深めた。東京・慶応病院で死去。



湯恩伯氏夫妻と共に 昭和28年(1953)  
前列左二人目から湯恩伯氏、岡崎氏、湯恩伯氏夫人。日本にて

戦後処理をする中で、岡崎氏は中国の湯恩伯将軍に会いました。戦後、湯氏は、たびたび日本を訪れ、岡崎氏と親交を深めました。

九月半ば頃、重慶から湯恩伯将軍が上海地区の接收にやってきた。中略。湯恩伯将軍が正式に接收司令官に任命されたという報道を聞いたときには、全く救われたという安心感でほっとした。前述のように彼は士官学校の出身である上に、勇敢であるとともに清廉な将軍であることが、日本の軍人の間にも、知られていたからである。湯恩伯将軍がやってくる前から、上海では日本の工場に働いていた中国人労働者の退職手当の要求が起り、日本側工場は支払賃金の調達ができないため、段々険悪な様相を呈して来ていた。中略。軍も、総領事も処置できなくて、とうとう大使館事務所に押しかけてくるようになった。大使館事務所は元来、日本の工場を監視する権限はなかったし、あったとしてももちろん融通する資金を持っていないから、敗戦という特別な事態の中で、所管の押しつけ合いをしている余裕はない。やむを得ず、何とか最悪の事態を避けるために努力してみようと、私が買って出た。ところが金がないのだから、何ともならない。そんな時、九月半ば、湯恩伯将軍が乗り込んで来て、それまで日本の登部隊が司令部にしていたクローブナーハウスに入った。私は湯将軍に訴える外ないと決心して、中略。面会を求めた。中略。貸借金を払おうにも金が作れない(日本人所有物資の移動禁止令が出ていた)ので物資処分を一部認めて欲しい。退職金支払いが遅れた場合にも暴動などにならぬよう配慮して欲しい、と二つのことを頼んだ。二つとも適当に処理しよう、と即座に快諾してくれた。やれやれと重荷をおろした思いで辞去しようと言われた私は、何事だろう、と胸をときどきさせながら再び腰を下ろした。湯将軍の話を要約すると次のようなことである。日本は日清戦争以来、わが国を随分いじめた。これにはわが国としては非常な恨みがあるのだけれども、今更そんなことを言っても始まらない。これからは、もう戦争はやめましょう。そしてお互いに手を握ってアジアを良くしましょう。これは蔣主席の考えでもあるから、岡崎先生もこれに協力して下さい。私は大変驚き感激して、「私は若いときから、日本と中国とは協力してまずアジア諸国の独立をかちとらなければならぬ、と考えていた者ですから、将軍のお言葉には大変胸を打たれました。おっしゃられるまでもなく私も微力を尽します」と答えたことであつた。

岡崎嘉平太著『私の記録』(東方書店昭和五十四年発行)より

「岡崎嘉平太がめざした世界平和への道を考える」第九回 講演会 の開催

2010.9.20



岡崎家の墓参(吉備中央町北) 中央が劉徳有先生ご夫妻



岡山後樂園の郭沫若氏の碑文前にて 右から二人目が劉徳有先生。左から二人目が夫人

後樂園仍在  
鳥城不可尋  
願將丹頂鶴  
作對立梅林  
郭沫若

(訳)後樂園はあれど鳥城の姿は今はなし。かわりに丹頂鶴をはなちて、梅林に配せん。

郭沫若氏は、旧制第六高等学校に在学されていた。戦後、来岡の際(劉氏は、通訳として同行)に、丹頂のいなくなった後樂園を見られて悲しみ、後に二羽のつがいを岡山県に寄贈された。

今年度の「岡崎嘉平太がめざした世界平和への道を考える」講演会は、山陽新聞社さん太ホールにて、9月20日(月)に開催しました。参会者は280名で、今後の日中関係、世界平和を考えるよい機会となりました。

第一部は、中国よりお招きした劉徳有先生(中国対外文化交流協会常務副会長)が、「岡崎嘉平太氏がめざした日中友好と世界平和への道」の演題で、講演してくださいました。劉先生は、毛沢東主席や周恩来総理、郭沫若氏など中国要人の日本語通訳を務められ、記者として、東京に15年間駐在されたご経歴もあり、日中関係をつぶさに知る歴史の証人です。岡崎嘉平太氏は、著書の中で『日本語のうまい劉徳有君』と紹介されています。劉先生のお話からは、周恩来総理等中国要人や岡崎嘉平太氏、松村謙三代議員らが国交断絶の困難な状況の中を、アジアの安定、ひいては世界の平和に向けて、身を投げ打って尽力されたことがわかりました。

そして、劉先生もまた永年にわたる日中友好に尽力された功績が称えられ、勲二等旭日重光章の称号を贈られています。通訳の難しさがわかる事実談も交えられての大変興味深いお話でした。

第二部は、「日中友好のかけ橋4人の岡山人」と題したシンポジウムを行いました。天児 慧早稲田大学大学院教授をコーディネーターに、土光敏夫氏の元秘書の居林次雄氏、岡崎嘉平太氏のご子息の岡崎彬氏、内山完造氏の顕彰をしておられる片岡良仁「先人顕彰会・井原」幹事長、犬養木堂氏の研究者の時任英人倉敷芸術科学大学教授の4人の先生方にパネリストをしていただきました。

岡山の土壌、岡山人の歴史観に基づく先見性、そして、情や道理、信用を重んじる精神性が二千年の友好の歴史を持つ中国への関心を生み、日中友好を牽引する力になり、現在に続いていることがわかりました。

この講演並びにシンポジウムは、講演記録「岡崎嘉平太がめざした世界平和への道を考える第九回講演会」にまとめ、一部三百円にて頒布しています。ご希望の方は、岡崎嘉平太記念館までお問い合わせ下さい。



第二部の様子

企画展「上海と岡崎嘉平太」の開催

2010.9.22 - 12.27

中国上海では、昨年万国博覧会が開催され、中国経済の発展はめざましく、世界の注目を集めているところです。そして、岡崎嘉平太氏が中国に初めて足を踏み入れた地が上海でした。

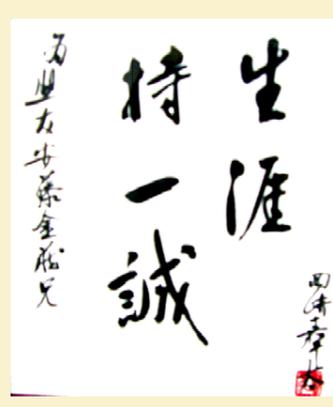
この度の企画展では、日中戦争から太平洋戦争へと日中関係が日々悪化してゆく中で、岡崎氏が学生時代からの日中友好の想いを胸に信念を貫き、戦争の早期解決を目指して奔走され、また、終戦直後の混乱する上海での終戦処理にも尽力されたことを紹介しました。

期間中は、1,473人の方が見学に来てくださいました。展示の一部をご紹介します。

日本銀行員として上海に赴任 昭和13年(1938)



◀ 写真は、上海に赴任した頃の岡崎氏。日本銀行から金融為替調査のため陸軍省事務嘱託として上海に派遣された。昭和12年より日中戦争が始まり、当時上海は、軍が占領していて、軍属にならないと入れない場所だった。



「生涯一誠」

◀ 日銀・華興商業銀行での部下だった安藤金蔵氏に贈った書。岡崎氏は、昭和14(1939)年5月～同17(1942)年11月まで華興商業銀行理事を務めた。

■ 昭和14年(1939)日本銀行を退職し日中合弁銀行「華興商業銀行」理事として赴任した。岡崎氏は、中国側の立場に立って仕事をすることが、ひいては、戦争を早期解決に導く道だとの信念で実務にあたられた。

日本軍が上海を占領し戦況が日々激しさを増す中で、軍の行動に憤っていた岡崎氏は、「上海の住民に不利なことをしてはいけない、苛めては戦争は終わらない」と、ことあるごとに日本政府高官に進言されていました。

また、岡崎一家は、一時期、上海に渡り共に暮らされており、当時の様子について吉井喜久子さんに回想していただきました。



◀ 上海市内に唯一あった日本庭園にて嘉平太氏の主催で、ピクニックが催され、日中の行員家族が招かれた。

社宅は、日本人と中国人の両家族が暮らしていました。皆助け合い、雰囲気はとても良かったです。社宅のペンキ塗りに来た中国人にお茶や果物を出すように岡崎さんから言われたので、お出ししたらとても喜ばれました。当時はそんなことをする日本人はあまりいなかったようです。岡崎さんは、中国人、日本人分け隔て無く優しく接する方でした。(抄記)

※吉井喜久子さんは、岡崎氏と同じ吉備中央町のお生まれで、昭和16年(1941)17歳の時に上海に渡り、岡崎家のお手伝いを上海と東京で三年ほどされていました。

■ 昭和17年(1942)に大東亜省に参事官を命じられ、上海大使館事務所で上海経済の立て直しにあたられた。混迷する軍の施策に対処し、住民と双方に善策となる案を次々と出された。

■ 終戦から終戦直後は、敗戦処理を任せ中心的な役割を果たされた。また華工労働紛争の解決のためにも奔走され、昭和21年4月日本へ引き揚げられる。

岡崎氏は著書の中で終戦をむかえる頃の心境について、次のように書かれていました。

『どっち道、命はないものと覚悟して敗戦の日の来るのを待つような心境になった。そんなとき辞世のつもりだったのか、今まで作ったこともない腰折れを口ずさんだ。十億の東亜の民の安かれと祈りて今日も かえりみず行く』。厳しい状況と気概が感じられます。